

学校文化を問い直す
- 小学校における整列指導を素材として -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
村井 一美

学校現場では自明のこととされる号令による整列や背の順整列は、児童・生徒にとって必要な指導なのだろうか。恫喝めいた号令による整列指導の心理的な影響や「身長差」という、成長期の児童の体格を基に序列を作ることの差別性は問題にはならないのか。小学校の教師として整列指導を行う中でこのような疑問を持ち、「号令」と「背の順」を使わないで整列させる実践を試みた。

実践によって「背の順」の廃止は教師と児童の意識から身長序列意識を消すことを確信し、また保護者からも感謝と支持が寄せられた。しかし、学校全体の指導からは逸脱するという問題に直面した。また、同僚の教師らの受け止め方も一様ではなかった。

本論では継続した現場での実践を記述しつつ、研究の視点から小学校における整列指導を再考した。教師の整列指導への考え方と実践の調査では、教師の経験や児童への指示、人権意識、集団規律等、その多様性が明らかになった。児童や保護者の傷つきから整列指導の問題性に気付き、自身の実践を見直そうとする教師がいる一方で、児童管理の点からも、やはり「号令」や「背の順」が必要であるとする教師もいる。

「号令」にせよ「背の順」にせよ、整列指導はこれまで教師からの一方的な指示のよって行われており、整列する主体である児童が、どのようなあり方を望んでいるのかには無頓着であったのではないかと。そこで、整列指導の一つのあり方として、児童と整列について話し合うという方法を試みた。すると、児童ら自身が話し合いの中で「背の順」の持つ差別性を明らかにしていき、各自が希望する整列順をお互いに交渉して決めていった。また、「号令」の是非についても話し合い、主体的な整列を希望してこれも拒否した。今回の実践で、児童は相互の話し合いから「背の順」の問題点が浮かび上がらせ、それを否定して独自の整列順を作り上げる可能性を示した。このことは、自明の指導として号令・背の順整列による一方的な集団管理を続けてきた教師達に対して、整列指導を通じた児童への新たな支援のあり方と教師自身の教育への姿勢の再考を促す提案になると確信している。

近代の学校制度が確立したときから、日本の学校には「号令」と「背の順」が存在し続けてきた。それは一方的に教師から児童へと発せられ、それに従順に従うことで集団が統率され、一つの教育的価値として評価されてきた。しかし、その指示は、個々の児童の心の中に抑圧感や劣等感を生じさせてもきた。このように考えると、学校における児童の人格形成や相互の人間関係作りに整列指導が与えてきた影響は小さくはない。

学校文化の中で、整列指導など当たり前に行われている日常の指導を新たな視点から見直すことは、教育現場にとって重要な営みの一つである。